
pure sky

sora

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

pure sky

【Nコード】

N1585W

【作者名】

sora

【あらすじ】

瀬戸内海に浮かぶ小さな小さな島。

その島で生まれ育った、お母さんを亡くした美空。

美空の空には、いつも霧がかかっていました。

そんな美空の前に現れた、「空」という名前の男の子。

空は、少しずつ美空の空の霧をはらっていきます。

自分の霧をはらってくれる空に、美空は次第に惹かれていきます。

でも、空には本土に残して来た大切な彼女がいて……。

そして、小さいころから美空を想い続けてきた幼馴染の竜登も動きだして・・・。

美空の初恋、竜登の想い。

そして空の好きな人・・・。

動きだす3人の恋。

それに空の複雑な家庭の事情も絡んできて・・・。

第1話 始まり

美しい空、美空。これが私の名前。
でも、私の空にはいつも霧がかかっている。
空、君に会うまでは・・・。

ここは、瀬戸内海に浮かぶ小さな小さな島。
島民およそ200人。
本当は何々島っていう名前がある・・・はずなんだけど、ここに住んでる人達は皆この事を島って呼ぶ。
だからかな？私は中2になった今でもこの島の名前を知らない。まあ、それ自体どうでもいいんだけどね。

島は、晴れているとても空が綺麗だ。
美しい空。美空。こんな名前がぴったり。
ちなみに私の名前も美空。
でも、私の空にはいつも霧がかかっている。
それはきつと、お母さんが死んだ時くらいから・・・。

「みいちゃん」
「あつ、田中さん」
この島では皆顔見知り。
すれ違う人すれ違う人、皆が私を呼び止める。
別にそれが嫌なんじゃない。こんな捻くれた私でも、それをむしろありがたいと思う。
この島に生まれ育った私達にとって、道を歩いていたら呼び止めるのが当たり前。呼び止められない悲しさは、本土に行けばよく

分かる。だから、この島の人はほとんどの人が一生この島で暮らす。きっと、私も一生この島で過ごすんだらうなあって思う。当たり前のように、この島で、一生……。

ねえ、空。きっと、この時の私には、この島で一生過ごすのがどれくらい難かしいか、分かって無かったんだね。
大好きなこの島で、一生……。3人で……。

「あのね、今度、島に引越してくる人がいるんだって」

「えっ？ほんとですか？珍しいですね」

「ええ、本当に珍しいわよね」

島に人が引越してくるなんて、何年ぶりだろう？

うーん、9年ぶりくらいかなあ？

「それでね、引越してくる方のお子さんがみいちゃんくらいの年頃なんだって。竜君以外の同級生ができちゃうかもね」

「竜以外の同級生ですか……。ちよつと想像できませんね」

竜というのは、島で唯一の私の同級生。本名は竜登。

島で私がみいって呼ばれているように、竜登も竜って呼ばれてる。

もちろん私も竜って呼んでる。

にしても、竜以外の同級生か……。

まっ、にしてもまだ同級生かどうかも分からないんだけど……。

「ああ。みいちゃん、ごめんね。今日はあと3軒くらい回らなくちや」

「はい。頑張つて下さいね」

島の女の子で仕事をしてない人のほとんどが、こうやって週に4、5回くらいおじいちゃんおばあちゃんの家を回る。って言っても島に独立してる人なんていない。皆が家族みたいな関係。約200人の大家族。その中に、近く同じくらいの年の人がやってくる。人見知りな私は、新しい家族を受け入れられるかなあ？そんな事を思いながらも、同級生だったらいいな、なんて考える。だって、私は竜

以外の^{いがい}同じ^{おなじ}年の^{とし}人^{ひと}を^し知らない。 たった1人^{ひとり}も。

そら、^{そら}不安^{ふあん}を抱^{かか}えながら、^{わたし}期待^{きたい}も感^{かん}じる。 ^{わたし}これが、^{わたし}君^{きみ}が島^{しま}に來^くる前^{まえ}の
私の^{わたし}様子^{ようす}でした。

第1話 始まり（後書き）

pure skyを読んで下さってありがとうございます。

pure skyは、まだまだ続きます。

予定では物凄く長くなる予定です、最後まで読んで頂ければ嬉しいです。

この小説についてですが、大体1話2000文字くらいで書いています。

これからもうしていく予定です。

2000文字くらいで書いているのは、見つけて下さった方も、2000文字くらいなら読んで頂き易いかな？という勝手な想像からです。

ちよつと意味分からないですよね（笑）

自分でもあまり分かりません（笑）

ここまで読んで下さってありがとうございます。

2話以降も読んで下されば、とてもうれしいです。

第2話 出逢い（前書き）

「前回までのあらずじー
瀬戸内海に浮かぶ小さな島。
その島に転校生が来る事に！
島で生まれ育った美空は、その前夜、転校生と馴染めるかどきどき
しながらも本土の人が来る事にわくわくしていました。
そしていよいよ転校生が島に！
美空は転校生に馴染めるでしょうか・・・？」

第2話 出逢い

空が転校してきたあの日……。あの日、竜はなにを思ってたの？
ねえ、竜、教えてよ……。。

「おはよー。今日は転校生を紹介するぞ！」

島の中学校の校長先生が言った。

この島の学校は、幼稚園兼の小学校、中学校の2校だけ。だから校長先生が授業なんて珍しくない。って言っても人口約200人の島に幼稚園も小学校も中学校もあるなんて贅沢だと思う。

まあ人口約200に相应しく、この高台中学校には生徒が7人しかない。あつ、今日から8人になるんだけど……。

そして、こんなに狭い島だ。私達が転校生を見ていない訳が無い。

転校生は、背の高くって大人っぽい、たぶん3年生の男の子。っていうか、中学生って信じられないほど大人っぽい。同級生っぽくないのは残念だけど、どうせ中学生と一緒に授業受けるんだしね。学年は大して関係ないや。

「ほら、三浦空！入って来い」

がらつ。さっき見た大人っぽい男の子が入ってきた。

「三浦空です。東京から引越して来ました。これからよろしくお願いします」

「三浦空は14歳だ。学年は2年。竜とみいと一緒だな」

えっ？あんなに大人っぽいのに中3！？しかも空ってなんか名前がぶつてる……。

「えーと、竜とみい？よろしく！」

「あつ、よろしく」

竜と声を合わせて言う。

「空は何で引越して来たんだ？」

竜が聞いている。

「えっ？……。まあ、色々あつて……」

「へえ……。まあいいや」

「とつ、ところで、みいつて本当は何ていう名前なの？」

えっ？いきなり話題ふる？

「みつ、美空」

「へえー、何か名前かぶってるね（笑）」

「うん。私もそう思った！」

「なあなあ、空はさ、村長に何て言われた？」

竜が急に入ってくる。

「ああ、何か色々。島にきてくれて嬉し……」

「そうじゃなくてっ！何て呼ばれた？」

「そういう意味か。くうって呼ばれたよ」

「じゃあくう！今日歓迎しようぜ！なっ、みい」

空に続いて竜まで突然話題をふってくる。

「うん。いいよ。島の綺麗な場所に連れてってあげる」

「さんきゅー！」

「じゃあ今日の7時にみいの家で」

「分かった」

こうして私達は空の歓迎会をする事になった。

空。今思えば、あの時から君に惹かれていたのかもね。
あの日、君が始めて空の霧をはらってくれた時から……。

第2話 出逢い（後書き）

第2話を読んで下さってありがとうございます。

1話の時に2000文字くらいで書くって書いたくせに、それをいきなり破ってしまいました。すみません。
やっぱり思いどおりになりませんでした。

ここまで読んで下さってありがとうございます。
よければ感想等聞かせて下さい。

第3話 始まりの予感 part 1（前書き）

―前回までのあらすじ―
瀬戸内海に浮かぶ小さな小さな島の中学校。
全校生徒7人の島の中学校に、転校生がやって来ました。
転校生の名前は三浦空。
空は島に馴染めるでしょうか・・・？

第3話 始まりの予感 part 1

「みいー！みいー！」

竜が私を呼ぶ。

「はい、ちよつと待つてー」
外に出る。

「ごめん、お待たせ」

「んっ？くうはまだ来てないか・・・」

「うん。まだ来てないよ。それより、どうしたの？こんなに早く来て。いつもは遅れて来るのに・・・」

「いや、今日くらい早くくるだろ！」

「・・・いつも早く来てよ」

私の言葉を、竜が笑って誤魔化した。

「竜、美空！」

竜を庇う様に、空が家に来た。

「島にチャイムつてないの？」

空が誰ともなく言った。

「チャイム？何だそれ」

それに竜が答える。

「んっ？チャイムを知らないの？」

んー、私もチャイムなんて聞いた事がない・・・。

なんて思っている、

「美空も知らないの？」

空に聞かれた。

「うん。知らない」

多分本土にある物なんだと思う。

でも、本土にあって島に無い物なんて珍しくないし・・・。

「まっ、そんな事気にしてないで、さっさと行こうぜ」

竜りゅうが開ひらき直なおった様ように言う。
そして、私達わたしたちは「出でかける」事ことになった。

「・・・ら、美空みそらっ！」

「は、はい」

「どうしたの？ ぼーっとして」

空そらに呼よばれて気きが付ついた。

実はこの辺あたりは、お母かあさんが死しんだかも知しれない場所ばしょ。

なんとなく、竜りゅうにも言いえていないけど・・・。

「うっん、何なんでもないよ」

「・・・」

空そらがあまり納得なっとくしていない顔かおで、でも、追求ついきゅうするのをやめてくれた

から、私わたしは少すこし安心あんしんした。

にしても、竜りゅうが空そらに見みせたかった場所ばしょってここだったんだ・・・。

てっきり「あそこ」かと思おもってたんだけど。

竜りゅうが空そらを「あそこ」に連つれて行く事ことは、結局けっきょく1度どもなかった。

なんで「あそこ」に空そらを連つれて行いかないか聞きいていたら、もう少すこし

早く気きが付ついたかもしれないのに・・・。

もう少すこし、竜りゅうを傷きずつけなかったのに・・・。

今後いまのうかい悔かいしても、もう遅おそい。

だって、だって竜りゅうは・・・。

第3話 始まりの予感 part 1（後書き）

第3話を読んで下さってありがとうございます。
今回はかなり短くなってしまいました。
3人で出かけるシーンを、どうしても2話に跨がせて書きたかった
んです。

だからって言うても短かすぎるんですけどね・・・（笑）

ここまで読んで下さってありがとうございます。
よければ感想等聞かせて下さい。

第4話 始まりの予感 part 2（前書き）

「前回までのあらすじー
瀬戸内海に浮かぶ小さな小さな島。
その島に住む、美空と竜登、そして転校生の空。
3人が遊びに行っている場所は、美空のお母さんが死んだかもしれ
ない場所でした・・・。
それを知らない竜登と、美空の隠し事に気が付いた空。3人の関係
が、大きく変わり始めます。」

第4話 始まりの予感 part 2

「おおー！夕日ー！」

空が叫ぶ様に言った。

「本土では夕日も見えないのか？」
竜が聞く。

「ああ、あんまり見えない。東京の空は灰色だったから・・・」
空が思い出した様に言う。

「へえ、じゃあ島の方がいいね」

何故だか、急にそう言たくなった。

「うん。そう・・・だね」

空が、少し迷った様に言う。

私は断然島の方がいいのにな・・・。

まあ、小学生みたいにこの島が世界中の中心だー！なんて思わないけど・・・、やっぱりこの島はいいのにな・・・。

空には、本土に何か未練があるのかな？

なんて思っていると、急に竜が喋り出した。

竜は昔から、急に喋りだす事が多い。

「っていうか、くうって東京に住んでたんだな。首都じゃん！」

「そうだよ」

首都、東京・・・。

将来行く事があるのかな・・・？

ううん。多分ないだろうな・・・。

空の家はどんな家だったんだろう？きっとチャイムがある、素敵な家なんだろうな・・・。

「・・・行ってみたい」

「えっ？」

空と竜が声を合わせて言った。

あつ、心の声が漏れたつ。

恥ずかしつ。

「みいは・・・、東京に行きたいのか・・・？」

「っ。竜の声から、少し傷ついてる様な響きを感じ取る。

こういう時、幼馴染って損だね。どれだけ上手く隠そうとしても、絶対相手に気付かれちゃう。

「ちつ、違うつ。東京じゃなくて、空の家だよつ。行ってみたいな

あーって思もつて・・・」

今度は、なぜか空が傷ついた顔をした。

「・・・」

3人の間に、気不味い空気が流れる・・・。

「えーつと、じゃあそろそろ帰る・・・かつ？」

この空気に耐えかねた竜が切り出した。

「うん。そうだね」

空もあつさり同意。

私はもう少しいたかったな・・・。

少し未練を残しつつ、私はおとなしく帰途についた。

途中で竜と別れて空と2人きりになった後も、なんとなく気不味い

空気を引きずったままで歩いてた。

でも、空が何かを決心して様に口を開いた。

「なあ、美空。さっき何か隠しただろ？」

空が私の顔を覗きこむ。

「何にもないよ」

言ながら、つい顔を逸らしてしまう。

でも、空は黙ったまま私から視線を外さない。

そして、つい言いってしまった。

「お母かあさんが、お母かあさ・・・んが・・・」

空そらは、私わたしにお母かあさんがいない事こと知しってるんだ・・・。

「大丈夫だいじょうぶ」

そう言いながら、私わたしの頭あたまを撫なでてくれた。

子供こどもみたいにしゃくり上げながら、いつまでも泣ないた、あの日ひ。
あの日ひ、君きみに恋こいをした。

第4話 始まりの予感 part 2（後書き）

第4話、読んでくださってありがとうございます。
できました、憧れの part 2 ♪
ほんとにありがとうございます。

これを読んで下さっている方から、「3人の苗字教えて」という御意見を頂いたので、ここに載せさせていただきたいと思います。

みい・・・佐藤 美空

くう・・・三浦 空

りゅう 竜・・・島中 竜登

です。そういえば、苗字でできたのって空だけでしたよね。

美空と竜登すっかり忘れてました（笑）

りゅうと 竜登は基本竜ですし、1番名前いない人ですね。

ではこの辺りで・・・。

ここまで読んで下さってありがとうございます。

よければ感想等聞かせて下さい。

第5話 美空の過去（前書き）

ー前回までのあらすじー

瀬戸内海に浮かぶ小さな小さな島。

その島に住む幼馴染の美空と竜登は転校生の空と仲良くなる為に、3人で遊ぶ事にしました。

空と話しをするうちに、空の過去を知りたいと思うようになる美空・・。

そして美空の想いに気が付き始め、複雑な想いを抱く竜登・・。
美空の過去に気が付いた空・・。

3人の関係が、大きく動き始めました。

第5話 美空の過去

「美空・・・、いいよ、無理しなくて」

そっいいながら、空が私を撫でる手を下に下ろす。

「・・・いいの、空に聞いてもらいたい」

竜にも隠してきた、お母さんの事・・・。

本当は誰にも言いたくない筈なんだ。

だけど、なんでだろう？

今は空に話たいって思う。心から。

空が私に気が付いてくれたからかな？

それとも・・・。

複雑な思いを胸に抱きながら、静かに静かに話し始める。

私の過去。空の霧の理由^{いじむ}。お母さんの話^{わけ}・・・。

「私のお母さんはね、お医者さんだったんだよ。島で唯一のお医者さん。子供の時からすっごく頭が良くて、将来大物になるって島中の人から期待されてたんだって。留学の話も出てたらしい。でも、お母さんはこの島が大好きだった。だから、島の人達の助けになる仕事が出来なかったんだって。で、島は医者不足でしょう？だから、小学生の時からお医者さんになるのが夢だったんだって」

空は、凄く真剣に私の話を聞いてくれた。

時々、うん、うんって頷きながら。

「だからね、お母さんは中学生の時に島を出て本土の学校に行った。そのまま高校に行って、大学に行って・・・。本当に医師免許を取っちゃった。医師免許を取って島に帰ってきた」

この話をする時、私はいつも誇らしくなる。

私のお母さんは、こんなに凄い人なんだよって。

本当に島の事を想ってるんだよって。

「島に帰って来たお母さんは、幼馴染で2歳年上で幼馴染の男の人
ー私のお父さんと結婚した。そして、2人で診療所を始めたの。島
の人は皆歓んだよ。島にお医者さんが来てくれた！って」

空は相変わらず真剣に聞いてくれている。

本当に優しいな、空は・・・。

ふとそんな事を思ってしまった。

「島にお母さんが帰って来たのに合わせる様に、島中さんー竜のお
母さんが妊娠した。その時お腹にいたのが、輝君こうだったの。って、
空は知らないか。輝君は竜のお兄ちゃんなの。本名は島中竜輝しまなかりゆつき。今
は本土の高校に通ってるよ」

輝君こう、懐かしいなあー。

そういえば最近会ってない。元気かなあ？

今度竜に聞いてみよう。

「その処置とか、対応が完璧だったらしいの。島の人にも凄く信用
されて、大して病気でもないのに診療所に来る人までいたんだって」
ここまで話して、私は少し躊躇った。

空は、私の躊躇いに気が付いたんだと思う。

急に、

「じゃあ、続きはまた今度聞かせて」

そう言って、帰ろうとした。

空の気遣いが分からない程小さい訳でもないし、ここまで話して躊
躇ったのも本当。

でも、何故か聞いてほしかった。

自分でも可笑しいと思うけど、何故か聞いてほしかった。

帰ろうとする空に、私はまた、お母さんの話を始めた。

「それから暫くして、また島中さんが身籠った。でも、今回はお母
さんも妊娠してしまった。お母さんは、断ったらしい。そして、2
人で本土で産もう。って島中さんに言っただって。でも島中さん

も島の人も、大丈夫お母さんならできるって、2人で島で産もうつて言った。お母さんも断りきれなくて……。で、竜が産まれる時お母さんに悪阻がきちゃったの。無事に産めたけど、お母さんは無理して体壊しちゃって……。だから、お母さんから生まれて来た私は体が弱かったの。お母さん、それをすごく気にしてて……。どちらにせよ、もうお医者さんはできないくらい体が悪くて、1日中家にはいたんだけど……。とにかく、私が風邪でもひいたら大騒ぎ！もう1日中付きっ切り。お母さんも体が弱いのに、無理してずーっと起きてるの」

・・・少し間を空ける。

これからいよいよ、本当に……。

ううん、私が決めた事だから。空に話すって……。

「私ね、小4年の時、肺炎にかかったの。お母さんは本当にずーつと付きっ切りで……。元々お母さんも体弱いから、お母さんも体壊しちゃって……。なのに私の看病をやめなかった」

また少し間を空ける。

「そんなお母さんを見て、お父さんは気晴らしになればって買い物頼んだ」

今度は長い間を空ける。

「・・・そしたら、疲れきったお母さんはさつき行ったあの崖から落ちたんだ、たぶん。あんまり詳しい事は分らないんだけど、たぶんあそこだろうって……。買い物袋も近くに落ちてたらしいよ。」

・・・話し終わった。

とうとう空に話してしまった。

何かすっきりした気分。

でも、瞳には涙が溜まってる。視界が霞む。

そんな私を、

「大丈夫、美空の嵯峨じゃないよ」

って言いながら、いつまでもいつまでも、空は優しく私の傍にいて

く
れ
た。

第5話 美空の過去（後書き）

第5話、読んで下さってありがとうございます。
わりあい重い話になってしまいました。
苦手です、こういう話。

ルビに関してなんですが、ルビって携帯から見るとすごく読みにくいですね。

こないだ友達に見せてもらって初めて知りました。
というわけで、すごく勝手なんですが、ルビを振るのは間違えやすい漢字だけにしました。
パソコンから見て下さっている方、申し訳ありません。

うーん、でも、これ見て下さってる方ってほとんどブログで知り合った方ばかりですよね。

じゃあ皆さん携帯から見て下さってるのかな？

まあ私が把握している方は皆さん携帯持ってますね。

結局パソコンで見る（携帯持っていない）のは私だけって落ちですか・・・。

・・・携帯欲しい。

以上、s o r aの呟きでした。（スルーして下さい）
ここまで読んで下さってありがとうございます。
よければ感想等聞かせて下さい。

番外編 空色飛行機

「カシャッ」

飛行機を見つけたら、手で四角形をつくる。

その四角形の中に飛行機を写して、カシャッと言う。

大好きな大好きな空君、貴方に逢う為のおまじない。

貴方に出逢ったのは8年前。

まだ5歳の時。

俗に言う「お金持ち」の家で生まれ育った私には、5歳の時から許婚がいた。

天宮空君。

それが貴方。

嫌だった。

いつか王子様が迎えに来てくれるって信じてた私は、空君を見て、

開口1番

「王子様じゃない。優里菜、王子様と結婚するの!」
って言ったよね。

今では、私の王子様は空君だけだよ。

友達に言くと、

「優里菜は夢見る少女だね」

って笑われちゃうけど・・・。

「王子様じゃない。優里菜、王子様と結婚するの!」

5歳の少女が、子供らしい無邪気な様子でそう叫んだ。

5歳の少女―宮下優里菜の母親は、このままでは折角のお見合い話が！とでも言うかの様に

「優里菜、空君は世界1の王子様なのよ」

と、ある事無い事ひっくり返るめて優里菜を宥め様とした。

まあ、「空君」が世界1の王子様である、というのは満更嘘とも言いきれないが・・・。

「空君」は、世界1の大金持ちとさえ噂される「天宮」の1人養息。「天宮」の莫大な遺産を継ぐであろう、唯一の遺産相続人なのだ。

優里菜の母が、必死になって優里菜と結婚させようとするほどの王子様である事に間違いはない。

ただ、もし「天宮」の正式な息子ができてしまえば、その立場は一揆に危ういものになる。

もしかすると、命を狙われるかもしれない。

まあ、簡単に言くと、養子なのだ。

といっても、「天宮」の1番若い者でもう62歳。

とても子供を産める様な年齢ではない事は、誰の目からも分かる事だろう。

「空君」こそ、もう確定事項として決まっている、天宮家の正式な遺産相続人だ。

4歳の時に両親を亡くし、遠い親戚にあたる天宮家に引きとられた。ややこしい身の上にある事も1つに、とても大人びた「空君」。

天宮家の遺産相続人としても、人としても文句の付け所がないくらい完璧に育った「空君」と結婚できるのならば、宮下家にとっても優里菜にとっても利益になる。というのが優里菜の母の考えだった。それも、優里菜の意見はなしにして、の話だったが・・・。

「宮下優里菜です。空様の婚約者候補として、天宮様には日頃からよくして頂き、とても言葉では言い表せない程感謝させていただいております」

お母様に言わされただけの台詞。

これが天宮家の大老に気に入られた理由だった。

私を気に入って下さった大老は、他の婚約者候補達をすぐに返した。この瞬間から今まで、そしてこれから先も、私は空君の許婚になった。

中々仲良くなれなかった。

空君は私には大人っぽすぎたし、2人とも割合人見知りな方だった。いつまでも、必要最低限の会話。

それでもいつしか、空君と2人の空間を愛しく想う様になった。

何故か、理解しあえる関係になってきた。

そう思い始めたある日の事だった。

「優里菜さん、僕といて楽しいですか？」

「えっ？」

始めは意味が分からなかった。

序所に、ああ、空様は私との距離を不快に思ってたんだな、って気が付いたけど……。

「はい、もちろんです。私は空様をお慕いしております」

咄嗟に口をついたのは、お母様に教え込まれた空様に対する言葉ずかい。

「……あの、よろしければ、優里菜と呼ばせて頂いてもよろしいですか……？」

「はい、喜んで」

「では、あの……、優里菜」

「はい、空様」

「空、でいいです」

「はい、空君」

たどたどしい会話。

当時7歳の私達は、お互いに他人行儀で……。でも、少しずつ近づく心の距離に、心地よさを感じていた。

その内、私達は完全に打ち解けた。

今は、空君が……。空君だけが、私の王子様だよ。

でも、毎日会っていた8年間が終わりを告げた。

空君が、瀬戸内海の小さな島に行く事になった。

理由は……。分らない。

子供の私達は、まだあまりに幼なすぎて……。ただ、時の流れを待つ事しかできない。

別れ際に言ってくれた、

「好きだよ。いつまでも、優里菜は俺の許婚だから」

って言葉を信じて待ってる。

ずっと待ってるよ。

「カシャッ」

1日10回飛行機を撮れたら願いが叶う。

もし10回撮れたら、お願いする事は1つだけ……。

「空君に逢いに行けますように。」

ずっとずっと、一緒にいれますように。」

空に願うよ。

貴方に逢いたい。

いつも、貴方を想ってる……。

番外編 空色飛行機（後書き）

番外編、読んで下さってありがとうございます。

優里菜が誰なのか、「天宮」空が誰なのか。

それは後々本編で書いていきます。

番外編、ちょっと書くの早かったかな？

もう少し・・・、本編で優里菜が出てきてからくらいに書く予定だったんですが、ちょっと焦って書いてしまいました・・・。

何かちよつと謎の話になっちゃいましたが、深く考えず、ただ普通の1話で完結の話として読んで下されば幸いです。

ここまで読んで下さってありがとうございます。

よければ感想等聞かせて下さい。

第6話 愛しい日々（前書き）

―前回までのあらすじ―

瀬戸内海に浮かぶ小さな小さな島。

その島に住む美空と竜登、転校生の空。

3人で過ごす内に、空の事を知りたいと思う様になる美空。

美空の気持ちに複雑な想いを抱く竜登。

美空の過去を聞いた空。

3人の関係が、大きく動き始めました。

第6話 愛しい日々

空が好き・・・。

私は、この事に気が付くのが遅すぎた。

もう戻らない愛しい日々。

君と過ごした季節・・・。

ね？ 竜・・・。

朝、いつもより早く起きた。

いつもより早めに待ち合わせ場所に行く。

空は・・・、まだ来ていない。

ねえ、空。

昨日、私の話を聞きながら何を思ってた？

何を考えていた？

そんな事ばかり考える。

3人の待ち合わせ場所。

私と、空、竜の3人の・・・。

でも、今朝私が待っているのは、多分空だけ。

空の事が気になる。

何で？

だって昨日、私の過去を話したんだもん。

包み隠さず、全部。正直に。

この時の私は、本気でそう思ってた。

夢にも、空が好き、なんて思っていなかった・・・。

私はバカだね。

でも・・・、もう少し早く気が付いていれば、何かが変わった？

大好きな竜と、もう少し早く向き合えた？

優里菜とも向き合えた？

答えは、NO。

結局こうなっていたと思う。

なら、私は後悔しない。

だって、後悔したって何も変わらないから。

竜は、そんな事望んでいないから。

これも、空、君が教えてくれたんだよ。

ねえ、空。

君に出逢って私は変わった。

始まりは、きつとあの時。

君に恋したあの瞬間・・・。

「美空！おはよー」

「-！おはよう、空」

「今日は早いね」

「でしょ？早起きしたの」

「偉い偉い」

そう言いながら頭を撫でてくれる。

嬉しかったけど、素直じゃない私は、

「-！？子供扱い？」

なんて、可愛くない事を言う。

「あつ、みい。明日から1回東京に帰るから。しばらく2人で学校行って」

あれ？空、何か嬉しそう・・・？

「分かった・・・」

「ああ、よろしく」

「・・・竜、遅いね」

「うん。まっ、いつもの事だろ？」

「そうだね」

「みいー！くうー！悪い、遅れた」

そう言っていると、竜が来た。

「遅い！」

空と声を合わせて言う。

「遅刻する。行くぞ」

竜が言う。

「・・・誰のせいやねん！」

空が言った。

竜が走りながら、

「何で大阪弁やねん（笑）」

と突っ込みを入れる。

そんな2人に、

「ちよっ、ほんまに遅刻すんでー」

と大阪弁で突っ込みを入れ、私達はそろそろ本気で走り出した。

第6話 愛しい日々（後書き）

第6話、読んで下さってありがとうございます。
少し短めになってしまいました。

次から、空は暫く本土に帰っていないなる予定です。

空の事と島の事と平行して書こうかなって思ってるんですが、皆様
のご意見お待ちしてます。

自分で決められません（笑）

「未来へ・・・」連載開始しました。

11月中に完結させようと思っています。

よければこちらも見て下さい。

ここまで読んで下さってありがとうございます。
よければ感想等聞かせて下さい。

第7話 島と東京（前書き）

―前回までのあらすじ―

瀬戸内海に浮かぶ小さな小さな島。

その島に住む美空と竜登、転校生の空。

すっかり打ち解けた3人。

でも、空が本土に帰る事に。

島の2人と本土の空。

それぞれの物語が始まりました。

第7話 島と東京

空のいない1ヶ月が始まった……。

「みい！」

「竜、おはよー。早いね」

「だって、くう居なかったらみいずっと1人で待ってなきゃ駄目だから……」

「いや、空が来る前はずっと1人で待ってましたよ？」

「それはノーカン」

こんな事を言いながら、竜の気遣いが嬉しい。

確かに空がいないと寂しかったし……。

「よしっ、じゃあ早めに学校行くぞ」

「久し振りに走らずに学校に行けるね」

私の言葉に、竜は笑って誤魔化した。

「おはよー！今日は早いね」

1つ年上で3年生の愛香ちゃんが言った。

「でしょ？珍しく竜が早く来てくれたの！」

「竜、いつも早くこなきや駄目でしょ？」

愛香ちゃんが竜に言う。

「愛香だって、いつも私を待たせるでしょ？」

愛香ちゃんの双子の妹、愛美ちゃんが言う。

「愛美ー、お姉ちゃんはもっと敬いなさい？」

「どっちかと言うと、お姉ちゃんは私でしょ？」

「えー、あたしの方が早く生まれてきたよ？」

「だから、性格的にはって事」

愛香ちゃんと愛美ちゃんの姉妹喧嘩は、島の名物となりつつある）

笑)

『キーンコーンカーンコーン』
チャイムが鳴った。

「空君っ！」

「優里菜っ！」

東京都羽田空港。

午後の便で東京に帰って来た俺を、許婚の優里菜が迎えてくれる。
許婚で、小さい頃から決まっていた結婚。

それでも、俺は優里菜を好きになった。

「優里菜様っ。走ってはいけません。転びますよ」

言われた瞬間、優里菜が躓いた。

「優里菜っ」

転びそうになった優里菜を支える。

「学校は？」

そしていきなり現実的な質問を投げかける。

島の青空は、俺の過去を聞かない。

でも、東京の灰色に空は、俺を現実に戻す。

「休んできた」

屈託無い笑顔で答える優里菜。

優里菜の笑顔を見る度に、青空を思い出す。

その青空は、どこか島の青空に似ていて・・・。

そんな優里菜の笑顔が好きだ。

荒んだ俺の空を真っ白に洗い流してくれる、優里菜のこの笑顔が・・・。

「駄目だろ？どうせすぐに会えるのに・・・」

「だって・・・」

中2になっても、優里菜の笑顔は変わらない。

いつでも俺を綺麗にしてくれる、婚約者の優里菜。

離れていても変わらない、俺の気持ち。

島は、俺を癒してくれた。

それでも、優里菜のいるこの東京が、俺の故郷だから。

嫌な思い出もあって、縛りもきつい。

でも、優里菜がいるなら・・・、東京も悪くないって思う。

優里菜は凄い。

笑顔だけで、人を元気にできるから・・・。

第7話 島と東京（後書き）

第7話、読んで下さってありがとうございます。

島の美空と東京の空。

暫くはこの構成でいこうと思っています。

読みにくいかもしれませんが、基本1人称が「私」であれば美空、「俺」であれば空。という風に見分けて頂けば間違いないと思います。

空が東京に行っている1ヶ月は、そこまで続けようと思っていないので、割合すぐ終わるかもしれません。

気まぐれな作者ですみません・・・。

ここまで読んで下さってありがとうございます。

よければ感想等聞かせて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1585w/>

pure sky

2011年11月17日02時01分発行